

九州大学松濤文庫蔵 『熊野の本地』 について

岩松, 博史
九州大学大学院 (博士課程)

<https://doi.org/10.15017/9444>

出版情報 : 語文研究. 75, pp.34-50, 1993-06-06. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



九州大学松濤文庫蔵『熊野の本地』について

岩 松 博 史

九州大学文学部松濤文庫に、『熊野の本地』上下二冊が収められている。原本は題箋が剥落し、内題もないため、一般的通称に従った書名が付される。また、本の体裁は、いわゆる大型奈良絵本と呼ばれるもので、奥書はなく、書写者、書写年代ともに不明だが、恐らく近世中期までに製作されたものと思われる¹⁾。

『熊野の本地』の内容については、すでに先学による多くの研究が存在するので、ここで改めて述べる必要はないであろう。その話の梗概は大筋において大差ないものの、諸本の数は極めて多く、系統もまた多岐にわたること、次に掲げる松本隆信氏による諸本一覧に一目瞭然である²⁾。

- A I 酒井宇吉氏旧蔵「室町中期」絵巻「熊野御本地」三軸
 〈酒井本〉
- A I 天理図書館蔵「元和八年写絵巻三軸」〈元和本〉
- A I 高野辰之氏旧蔵絵巻零卷一軸

- A II 「寛永」刊丹緑絵入本「くまの、ほんち」三卷（横山重氏・天理図書館・日本民芸館蔵）〈丹緑本〉
- A II 寛文八年刊絵入本「御すいでん」三卷（国会図書館蔵）
- A II 「元禄玉水」井筒屋三右衛門刊絵入本「御すいでん」二卷（東洋文庫蔵）同上西村屋与八後印本（東大附属図書館・大東急記念文庫蔵）
- A III 徳江元正氏蔵写本「熊野御本地」一冊〈徳江本〉
- B 杭全神社蔵「室町末」絵巻一軸〈杭全本〉
- B 京都大学国文学研究室蔵写本「くま野」一冊〈京大本〉
- C 大東急記念文庫蔵奈良絵本「くまの、本地」二冊〈大東急本〉
- C 有馬丈二氏蔵絵巻「くまの、本地」三軸〈有馬本〉
- C 国会図書館蔵奈良絵本（首欠）二冊〈国会本〉
- C 高野辰之氏旧蔵写本「熊野ノ本地」五冊
- D 慶応義塾図書館蔵「室町末」写本一冊〈慶応甲本〉
- E 蜷川第一氏蔵「室町末」奈良絵本一冊〈蜷川本〉
- E 天理図書館蔵「室町末」大型奈良絵本「熊野の本地」二

冊〈天理甲本〉

E 国会図書館蔵「寺社書上」四十九所収「熊野大権現縁起」

一冊

F 東京大学国文学研究室蔵弘治二年奥書写本「くまの、御

ほん地のさうし」一冊〈弘治本〉

G 天理図書館蔵横形奈良絵本二冊〈天理乙本〉

H 高安六郎氏旧蔵奈良絵本「くまの、ほんち」二冊〈高安

本〉

I 慶応義塾図書館蔵寛永十八年写本「ごすいでん」一冊

〈寛永本〉

I 高安六郎氏旧蔵奈良絵本「くまの、本地」二冊〈高安別

本〉

I 酒井宇吉氏旧蔵奈良絵本「熊野の本地」三帖

I 岡田希雄氏旧蔵写本「熊野本地」一冊

I 高野辰之氏旧蔵絵巻巻一軸

I 慶応義塾図書館蔵絵巻巻一軸〈慶応乙本〉

このように、松木氏は計二十五本を掲げて、A IからIまでの十一系統に分類する。この諸本一覽を含む論考が発表された後、松木氏は『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』を発表し、さらに数本を増補した。そしてその後にも、数種の『熊野の本地』の翻刻、影印がこれまで公刊されているが、ごく若干の例外を除いて、それらは松木氏の種類A IからIまでの何れかの系統に含まれる。本稿で取り上げる九州大学文学部松濤文庫蔵「熊野の本地」(以下、松濤本)の本文について考える場合にも、まずは既存のどの系統に含ま

れ得るのかを検討すべきであろう。

二

現在、翻刻、影印などで目にするこの出来る『熊野の本地』諸本は、断簡も含めて約三十本ほどであるが、松濤本をそれらと一通り突き合わせて検討してみると、単純に何れかの系統に含まれるわけではないように思われる。

〈表(1)〉に掲げているのは、物語の主人公、五衰殿女御が天竺摩訶陀国の善財王に見いだされ、寵愛を受けることとなる場面の本文である。表の上段には松濤本の本文、下段には松木隆信氏の分類で言うE系統の天理図書館蔵「室町末」大型奈良絵本(以下、天理甲本)の本文を掲げる。

大まかな筋はもちろんのことであるが、表中に傍線で示している通り、細かな表現まで、両者はかなりの一致を見せている。本文中に現われる挿し絵の位置も、ここでは一致しており、松濤本と天理甲本は極めて緊密な関係にあると言えよう。さらに〈表(1)〉に掲げた部分のみならず、松濤本全体の約半分以上が同様に天理甲本に近く、天理甲本を含むE系統から松濤本への本文の影響関係が想定されるが、松濤本全体を通して見た場合、単純にその点だけで割り切れるものではない。

次に、〈表(2)〉に掲げるのは、本文の冒頭部分である。摩訶陀国の都の威容、善財王の後の数などが述べられ、王が太子の不在を嘆く場面へと続いている。表の上段に松濤本、中段にC系統の大東急記念文庫蔵奈良絵本(以下、大東急本)、下段に天理甲本の本文を掲

松濤本

さてもかくいのり給ふしるしにや、しゝんてむに大臣くきやうな
みる給へる折ふし、後の数をかそへさせ給ひて、わか女御は千人
とこそおほゆなれ、いま一人はいつくなるらんと仰ありければ、
ある大しん、このにしのはしに五すい殿におはします御わすれあ
りけるやらん、いと心ぼそけにてあはれなる御さまにみえさせ給
けりと申させ給へは、

その時みかと、けにさる事ありしとおほしめしいて、としをか
そへさせ給へは六ねんになりぬ。三とせをすきてのち、いかはか
りのことをかおほしけむとおとろかせ給ひて、やかて行幸なり
ぬ。〔挿絵〕

ほとけの御しるしなれば、いかてかをろかならん、かゝやくはか
りにみえさせ給へは、この人を日ころにわすれけることのおさま
しさよ、とおほしめし、やかて五すいてんの后になしたてまつり
給て、御おほえあさからす。

けふよりのち、われをわれとおほさむ人は、此后をもてなし給へ
とせんしありければ、
大臣公卿藏人以下の人々、いかにもして御きそくにいらはや
と、花をおりてそまいりける。

E 天理甲本

その御しるしにや、六ねんと申十月に、御かと、御ころしつか
にて、大しんくきやう、なみいたまふに、きさきのかすを、かそ
へたまふに、わかねうこは、せんにとこそおほゆるに、いま一
人は、いつくに、おわしますやらんとおほせありけり。

ある大しんの申させたまふ、このにしのほうに、こすいてんと申
所に、おわしますねうこそ、まことに、ころほそけに、見た
てまつるも、あはれにこそと申たまふ

そのとき御かと、さる事ありと、おもひいたし給ひて、としを、
かそへたまへは、六年になりぬ、いとおしや、三ねんを、うちす
きたまひけんとき、いかはかりの事をかおほしけんとして、やか
て、きやうかうなりたまひけり

〔挿絵〕 ほとけの、御しるしなれば、いかてか、おろかならん、
あたりも、かゝやくやうに、見へ給ひければ、この人を、ひこ
ろ、わすれけることの、あさましさよとて

やかて、こすいてんのきさきに、なしたてまつり、御おほえ、あ
さからす

けふよりのちは、われをわれと、おほさん人は、みなこのこすい
てんのきさきと、もてなしたまへと、せんし、ありければ
大しん、くきやう、くらんと、たきくち、十まんよにんの人々
も、いかにも、御きしよくに、いらんとて、花ををりてそ、まい
りける

松濤本

むかしてんちくまかたこくといふ国あり。そのくに、大わうおはしましき。御なをは、せんさいわうとそ申ける。たいこくのわうとならせ給ふ事、すくれてめてたき御ことなり。さる程に、みやこのうちは四十九條、大りのうちをめぐる事七日なり。たいわう一てむをおさめて、大臣くきやう以下十万人、六千人のくら人、六ひやく人のけむひいし、たうくとしてめてたかりけり。さて、千人の后をすへならへまいらせ給ふ。いつきかしつき給て、つねに、きかくをとのへ、よるひるのさかいなく御あそびをむねとてぞ、すくし給ける。としころになりぬれとも、王子一人もましまさず。きさきたちをてうあひし給て、月日をすくし給ひけるに、

やよひ中しゆんのところ、みなみおもてを御覽あれは、なつかしき木のえたに、小鳥、すをくひて子をうみそたてやしなふを御らんして、御心をすまし、あはれなる物かな、あのとりはいかほとのをんをえんとて、かやうに子をはやしなひそらつらん。まろは千人のきさきをいつきかしつけとも、

C 大東急本

むかしてんちくまかたこくといふくにあり、わう一人まします、御なをはせんさいわうとそ申ける、よにすくれて、くらぬめてたくおはします事かきりなし、みやこのうちをめぐる事七日なり、一まん人のたしいんくきやう、十まん人のてんしやう人、六まん人のけんひ、しつくたうたうとして、めてたくそおはします、せん人のきさきをあいしたてまつり、きよかうをとのへ、よるひるの御あそびにて、あかしくらし給ける、

三月のころ、なんてんへ出させ給ひて御らんするに、ことりのかい子をそたて、はこくむを御らんして、あはれにおほしめて、大わう大しんをめされておほせられけるは、あれほとのことりたにも、子をもちてそたてはこくむならひあり、みつからは千人のきさきをあいしたてまつるは、もし

E 天理甲本

てんちくにくにあり、そのくにのわうの、御なをは、せんさいわうとそ申ける御ころはへ、たくひなく、たみをあはれみ給ふ事、人のおやの、子をおもふか、こつくなり、ふくかせも、ゑたをならさず、ふるあめも、ときをかへすあしたにまいり、ゆふへに、つかうまつる人々、一まんの大しん、二まんのくきやう、そのほか、くらんと、たきくち、以上、十まんよにんなり

せんにんにようこ、七人のきさきを、もちたまへり、

我くらゐにたつへきわうし、一人もなし。
いかせん。御身をうらみ給ひて、ちゑか
しこき大しんをめして、此ことをせんしあ
るやう、あの木のえたに、ことりのすをく
ひて子をやしなふは、ほうをむありともみ
えず。まろは千人のきさきをかしたつきて
も、かひなし。一人つゝまうけ給ふとも、
千人のわうしなるへきに、なとか一人の太
子さへなかるらんとなげかせ給へは、

大臣申させ給やう、まことに王子のおはし
まさぬ御事を、をの／＼なげき申なり。千
人になりぬれば、あまたの御なかに王子お
はしまさぬ事、なげかせ給ふ事御ことほり
なり。七ちん満はうの御たからも、ほたい
のたねとならん事、さらになし。ひんくう
のしゆしやうに、せきやうをひかせ給ふ
し。これに過たるほうい、けうやうの子に
もすくれたりと申させ給へは、大わうこと
はりとおほしめし、さらは吉日をえらひ、
ほうせよとて、御くらをひらき、もろく
のたからをとりいたして、せきやうにひか
せたまふ。

や一人のわうしをもまうまうくるかとおも
ふに、なとか子といふものゝなかるらん、
わかくらをゆつるへきわうしもましまさ
すと、御なげきあり「挿絵」

大しん申させ給ふやう、七ちんまんほうと
申とも、一としてほたいのたねとなるへか
らす、たゝまとしからん人には、たかきい
やしきをゑらはす、せんきやうをひかせま
しまさんとする事こそ、わかけうしにも、
なをまさる事とうけ給候と、申させ給ひけ
る、このよし大わうきこしめして、けにも
ことはりとて、せんこんをおこし、こしや
うをねかはんとおほしめし、よろつのくら
をひらきて、せきやうをひかせたまひけ
り、

ける。

まず松濤本と大東急本を比較してみると、冒頭の描写や、三月に善財王が小鳥が巣くい子を育てるのを見て、太子のないのを嘆く部分、さらに大臣の進言にしたがって、貧民に財宝を施す部分など、傍線で示した細かな描写も含めて、両者は非常に近い本文を持つと言える。一方、天理甲本は、冒頭の描写において都の威容を示す記述がないばかりでなく、王が太子のないのを嘆く部分以下の記事がそっくり欠けており、松濤本とは大きな違いを見せる。

このように、冒頭部分においては、天理甲本よりはむしろ大東急本の方に近い本文を松濤本は持ち、単純な天理甲本系統からの引き写しではないことが明らかであるが、〈表②〉に掲げた冒頭部分に続く本文を検討してみると、やや状況が変化してくる。

次の〈表③〉は〈表②〉につづき、五衰殿女御が王の寵愛のないのを嘆き、観音に祈誓する場面である。一段目に松濤本、二段目にB系統の杭全神社蔵「室町末」絵巻（以下、杭全本）、三段目に大東急本、四段目に天理甲本を掲げる。

一見したところ、四本は大筋において大差ないが、〈表②〉の冒頭部分で近い本文を持っていた大東急本と松濤本を比較すると、大東急本には二重傍線で示しているように、五衰殿女御が王の寵愛を得られないのは、他の后たちの呪詛によるという松濤本や他の本には見られない、独自の記述が見える。一方、二段目の杭全本を見ると、傍線で示すとおり、七夕の故事を始めとして、細かな表現において松濤本とほぼ一致する。四段目の天理甲本もかなり松濤本に近いけれども、杭全本にある七夕の故事がなく、細部においても若干の差異が見られ、〈表①〉で見られたような近接性は薄いようである。

従って、〈表③〉の部分については、天理甲本や大東急本よりもむしろ杭全本の方が松濤本に近い本文を持つと言えそうである。

〈表①〉〈表②〉〈表③〉において、松濤本の冒頭部分から途中までを他の諸本と比較してみたが、ここで松濤本は単一の元本に拠っているのではなく、大東急本や杭全本といった複数系統の諸本の影響関係が見られることが明らかになった。この部分では、比較的明確な形で諸本の特徴が本文中に現われていたが、より複雑な様相を見せるのが、松濤本の上巻の巻末部分である。次の〈表④〉の上段に松濤本、下段に天理甲本の本文を掲げる。

この部分は、善財王の九百九十九人の后たちの姦計のため、五衰殿女御が武士たちの手により山中へ連れ去られる場面。松濤本と天理甲本は、傍線を引いて示している、

いかはかりうれしからんとおもひしにしての山ちをいそくつら
さよ

の和歌、および「ものゝふ申やう、せむしかりありて、」以下の部分についてはほぼ一致を見るが、その他の部分ではかなり異なっている。たとえば、松濤本の二重傍線を引いている②「水くきの」と④「なけき行く」の二首の和歌は天理甲本に見えず、逆に天理甲本にある「つきそひし」の和歌は、松濤本には見えない。また、それ以外にも、五衰殿女御が連れて行かれる場所の名称など、細かな表現における相違が著しい。

〈表④〉のこの部分を他の諸本と比較してみると、全体的に一致しているものは見いだせないが、和歌を含めて、部分的に近い記述

〔表(3)〕

<p>松濤本</p>	<p>B 杭全本</p>	<p>C 大東急本</p>	<p>D 天理甲本</p>
<p>かくて、よるひる御たはふれの中にも、王子おはしまさぬことをなげかせ給。きさきの御かたへ、ひと夜つゝめくらせ給ふに、さいしやうの御むすめ、せんくはう女と申せしを、こすいてんの后と申て、御すかたならひなくおはしましけるか、いかなるにや、みかとの御おほえすくなくて、御かたへおはします事なかりけり。人めもいかはかりおほしめしけむ、夜をわすれすめくらせ給ふさへ、三とせに一夜の契りなり。ひとよのしゆんかけぬれば、六年なり。たなはたの、としことにあひ給ふさへかなしきに、たゝひとり、とし月ををくらせ給ふ事、いかばかりおほしめしけむ。十一めんのくはんせをむを七すんにつくりあらはしまいらせ給ひて、よもすからみやうこうをとなへ、</p>	<p>そのなかに、けんさいしやうと申人の、御むすめに、せんくはうにうこと申、きさきをわしけり、千人のきさきの御なかに、かみかたち、すぐれておはしけり、のこりのきさきたちの、御かたへは、ひとよつゝ、いらせ給ふ、このにうこの御ことは、わすれさせたまふ、一まはりは、三年三月に、まはりあい給ふ、此きさきは、すてに、六年六月になりにけり、 たなはたの、としに一との、ちきりをさへ、久しきことゝは、申なるに、いつとなき御つれくゝに、おはしましけるか、たけ一しやく四寸の、十一めんくはんおんを、つくらせ給ひて、</p>	<p>千人のきさきを、一夜にひとりつゝさためて、千夜をめくらせ給ふ、そのうちに、へんさいしやうの御むすめに、せんくわうによこと申きさき、五すいてんにわたらせ給ける、みめかちうつくしくして、やことなきほどにそ、わたらせ給ける、されとも大わうの御心にも入給はずして、九百九十九人のきさきたちの、御方へかよひ給へとも、せんくわうによこの御かたへは、御めもかけ給はず、のこりのきさきたち、千夜を一夜つゝめくらせ給へは、三ねんに一夜つゝこそあわせ給けれ、せんくわうによこの御心のうち、人めいかはかり、はつかしくそおほしめしける、げにこれはしかしなから、九百九十九人のきさき</p>	<p>その中に、にしのほうに、こすいてんと申、ねうこ、おほしませ、御おほえおるかにして、十七の御としより、まいりたまひて、十九の御としまで、うちすきたまふ 一夜かそへたかへなは、六ねん、むなしく、すき給ふへし、三ねんに一夜、まはりたまへりこのこすいてん、三ねんをすきさせたまへは、そのちいかはかりの事をか、おほしけん、せめて、おもひのあまりにや、むかしより、いまにいたるまでも、くわんをんこそ、人のねかひをは、みてたまふなれとてたけ七寸の、十一めんくわんおんをつくり、くやうしたてまつ</p>

なむたいひくはむせをんほさつ、おなしくは、大わうの御おほえあらせたまへと、たねんなくきせい申させ給へとも、その御しるしもみえされは、おんりしやうをさつけさせ給へ。むかしより、くはんをむこそ、しゆしやうのねかひはみたてまふなれ。けに／＼このねかひかなふましくは、うき世になき身となさせたまへと、よるひる、きねんし給ひけり。

ひるはひめもそこに、かうをたき、よるはよもすから、みやうかうを、となへ給ふ、

たちのしゆそし給ふなり、あまりのあさましさに、十一めん観音をつくりあらはしまいらせて、ひるはひめもす、よるは大わう心かはり候はて、もとのことくわかたへいらせ給へと、いのらせ給ひけるにや、

り、夜るひる、きせい申たまふやうは、しかるへくは御かると、さるひとありとはかり、おもひいたさせたまひ候へと、しやうしんけつさいして、申たまふ

〈表(4)〉

松濤本

その時后たち、せんしをつくり給やう、そも／＼この宮のうちらに、さいしやうのひめ君、せんくはう女と申きさき、あくわうはらめるによつて、宮のうちにあくまきたりて、御代をさまたくるなれは、五すいてんをは、これよりみなみ七日ゆきて、きんこくの山、ちこくせんしのたに、ほくせきのいはやのうちにて、うしなひ奉るへしとせんしくたし給へは、八人の物のふ、うけたまはつて、こすい殿へ参り、よみあくることあはれなれ。此たいりをつるのすみかところ、おほしめしつらんに、きんこくの山こそすみかなれと申せは、后は御なみたにむせひ給ひ、いかなるつみのむくひにて、かゝるうき身となりぬるそや。女の身なれは、人を

E 天理甲本

大わうかへりたまふと、きこへければ、ききたち、しおほせたりとて、よるこひ給ふ、さて、いかにもして、こすいてんを、うしないたてまつらんとて、又よりあひて、さゝめき、せんしをかき給ふは

この、にしのはうにこすいてんのきさき、はらみたまへり、わうし、さためて、あくわうなるへし、むまれたまはぬさきに、これよりみなみ、十五日ゆきてちこんしやうの山、ひたとくわうのふもと、きくすいのきた、はんとうのいわやの、まへにて、御くひを、きりたてまつるへしとて、つるきをくして、ものゝふ、十五人めして、おほせつくる

うしなふこともなし。なにのゆへそとなげきかなし給ふ事かきりなし。ものゝふ、御出をそし、とくくとせめたてまつれば、御なみたにくれさせ給ひて、とかくの御返事もなし。そのとき、ものゝふ、かくてはかなふましとて、御前ちかくまいり、つるきのさきにてみすをあけ、をそれながらとく御いてあれとかさねて申ければ、きさき、せんしにてはありながら、けさ、うのとさまで大わうのこにおはしましつるに、これまできたるあさましさよ。君をおもは、かけなふみそといふ事ありとおほせらるれば、物のふ、けにもとおもひ、下へおりてとく御出あれとせめ奉る。かくてありとも、かひあらし。いてなはやとおほしけれども、御心も身にそはず、さらにうつともおほされず、いまをかきりとおほしめすに、いとあはれにかなしくおほしめして、物し給ふを、やまとうたにやはらけてみれば、かくなむ

は

とあそはして、御まくらをうらむはかりになり給ふ。ものゝふはやとくくと申せは、なみたともにてさせ給へは、御なこりおしみとりとむる人もなきに、ゆたかなる御くしのみにすにかゝりて、ひきとむる玉のすたれは又

いかはかりうれしからんとおもひしにしての山ちをいそくつら
さよ「挿絵」

⑤ 五すい殿の御としは十九にならせ給ひけり。はしめてつちをふませ給ふ事、なにたへんかたもなし。ものゝふさきにをつたて、あゆませたてまつれば、しやけむのいしにあたりて、御あしはくれなるのこくとくにちにてそめたり。あゆませ給ふみちすから

ものゝふ、うけ給、せんしなれば、ちからおよはず、こすいてんにまいり、せんしのおもむき、申あければ、

きさきはとかく、物ものたまはず、ゆめに夢みる、こちして、こはいかになりゆく、わか身なるらん、つゆしもならば、きえもうせ、みつならば、なかれもゆかて、いかなるめをや、見んすらん

おとにきくたにも、おそろしきに、わか身にあて、されはとよ、かゝるうき事を、きかん事はと、おほしめし、御ころみたれて、とかく物をも、のたまはず、きぬみきかつき、ふしたまふものゝふ申やう、とく御いて候へ、はるの、みちにて候と申に、あまりおそく、いてさせたまへは、ものゝふ、御ゑんにあかり、みすを、なきなたにて、をしきりて、御いて候はずは、うちへまいり候へしと申

そのとき、をきあかりて、しはしまち給へ、けさのうのときまでは、大わうの、すませたまへるところへ、物はきながら、おはすへきそとて、いてたまへは、みに、御くしのかかりければ「挿絵」

つきそひし、人にはなをも、まさりけり、われをとむる、たまのすたれは

いかはかり、うれしからんと、おもひしに、しての山ちを、いそくつらさよ

と、御まぐらの、しやうしにかきつけ給ひて、出させ給ふ、ものゝふ、うけとりて、さきに、をいたて、ゆきければ、さらに、あゆみやりたまはず

は五色にそみえにける。道しはの露けきにもいよ／＼御なみた
と／＼まらすして

なげき行道の露にも袖ぬれてなかきわかれをおしむ身なればや
とあそはしけるを、ものゝふはきゝもしらぬにや、をいたてまい
らせてゆくに、さらにあゆみやりたまはず。ものゝふ申やう、せ
むしかきりありて、われらか手にかゝりたまへは、ゆかしとおほ
しめすともかなふまし。あゆみ給へとせめければ、これやこの、
こくそつのさい人をせめころすらんといふもこれにはしかしとお
ほしける。なく／＼いつくをふむともおほえず、四五日はかりは
かちにてあゆみ給へるか、そのゝちはかつて御あしのはたらか
す、御ものすそも、ちにまみれ、はれいためは、ひろき野中にな
きふし給ふ。ものゝふはらをたて、つえをあてたてまつらんと
そくるひける。〔挿絵〕

かくおそろしきものゝふの中に、さすかに后にたち、太子をはら
ませ給ふ御人をあゆませ申すはいとおしく、天のをそれとも思ひ
て、こゝかしこ、むまうしをたつぬれとも人家ちか／＼らぬ山野を
ゆけば、すへきやうなきに、まき野のこまあれていさむるあるに
むかつて、をのれきさきをのせ奉りてむやといへは、立と／＼ま
り、かうへをうなたれてをりければ、ふちのかつらをくらにつく
りて、のせたてまつる。まことにふひんのわさなりける。〔挿絵〕

(上巻終り)

(下巻) ひたとくわうのふもとにおはしつきたりければ、ものゝ
ふつるきをぬきてうたんとするに、ぬけす。さらはいころしたて
まつらんとすれば、ゆみもやもおれけり。こしのかたなをみれ
は、一とうにおとしけり。

ものゝふ申やうは、せんし、かきりありて、われらかてにかゝり
たまへは、ゆかしとおほしめすとも、かなふまし、あゆみたまへ
と、せめければ

これやこの、こくそつの、さい人をせめころすも、これには、よ
もしかしとぞ、おほしめし、なく／＼、いつくをふむともおほへ
す、心はこゝろ、あしはあしにて、四五日はかりは、あゆみたま
へとも

そのゝちは、かきたへ、御あしはたらかす、ちなかれて、はる
／＼とあるほどに、なきふしたまへは、ものゝふ、はらをたて、
くるいけり

その中に、こゝろある、ものゝふ、ありけるか、まきのむまをと
りて、ふちのかわを、くらにつくり、のせたてまつりて、ひたと
くわうのふもとに、ゆきつきたまふ〔挿絵〕

さて、つるきをぬきて、御くひを、うちたてまつらんとするに、
さらぬけす、いころし申さんとすれば、ゆみやおれけり、さし
ころさんとて、こしのかたなをみれば、一とにおとして、なかり
けり

を持つ本が存在する。二重傍線部①の五衰殿女御から武士たちへの言葉は、杭全本に、

せんしかかりあれは、いてゆくへし、されはきみをたつとくせは、かけなふみそとこそいへ、けさうのときまで、大わうのおはしましつるに、しもにて申へし

とあり、松濤本の「君をおもは、かけなふみそといふ事あり」と同様の言い回しを持つのは管見の限りではこの杭全本のみである。また、二重傍線部③の五衰殿女御が武士に追われていく場面の描写は、F系統の弘治本に、

御年十九にならせ給ふ。はじめて土を踏ませ給へば、なか／＼たとへん方もさらになし。物のふどもはこの女御を先に追つ立て、⁽¹⁾「とく／＼歩み給へ」と責め申すは、たゞひとへに罪人を阿防羅刹にむかへるさまなり。御心には急がせ給へども、邪見の石に御足の当りて、紅の血流れ出て、御衣の裾を染めさせ給ふ。通らせ給ふ跡は五色の色にぞなりにける。道芝の露も涙も御袖の争ひになりて見えさせ給ふ。

とあるのと比較すると、女御の年齢、「をつたて、」「しやけむのいし」、「五色」、「道しはの露」などといった表現を含め、両者は極めて近い本文関係にある。

天理甲本に見られない、松濤本の二首の和歌については、②の「水くきの」の和歌がA I系統の天理図書館蔵元和八年写絵巻

(以下、元和本)に、

みつくきの、あともみわかす、なりにけり、してのやまちの、
たひにいそけは

とあるのをはじめとして、A II系統の「寛永」刊丹緑絵入本、(以下、丹緑本)、杭全本、大東急本、弘治本、H系統の高安六郎氏旧蔵奈良絵本(以下、高安本)にそれぞれ若干の差異があるものの、同様の和歌が見られる。④の「なけき行」の和歌は、大東急本に、

わかなけく、露となみたに、そてぬれて、なかきわかれを、
しむはかなさ

弘治本に、

歎き路の露にも袖は濡れにけり永き別と惜しむ身なれば

とあり、こちらは言葉の差異がやや大きいのが、内容的にはほとんど違いはなく、同じ和歌からそれぞれ変形した結果と考えられ、三種は同系統のものと思倣してよいであろう。

このように、(表④)に掲げた上巻末部分は、諸系統の要素が混在しているように見えるのだが、このことと、先に述べた冒頭部分での本文の性格とを考え合わせると、松濤本の本文は、ある特定の系統の本文をそのまま引いているのではなく、天理甲本の系統が中心となりながらも、数種類の系統の本文が組み合わされて、新しく構

成されたものではないかと想定される。

この想定の根拠になると思われる具体的な点を、次にいくつか取り上げて示したい。

まず、〈表(4)〉に波線で示している地名。これは五哀殿女御が連れ去られた場所の地名を表している。松濤本では波線(a)「きんこくの山、ちこくせんしのたに、ほくせきのいはや」となっているが、ここに対応する天理甲本の本文は、同じく波線(d)で示すとおり「ちこんしやうの山、ひたとくわうのふもと、きくすいのきた、ほんとうのいわや」とあり、両者は一致しない。ところが、〈表(4)〉の末尾に掲げる松濤本の下巻の冒頭部分を見ると、波線(b)の地名は「ひたとくわうのふもと」となっていて、先に見た上巻末の波線(a)とは矛盾している。そして、この部分は同じく波線(b)で示す天理甲本の「ひたとくわうのふもと」に一致し、ひるがえれば天理甲本の波線(d)での表現とも一致していることになる。

松濤本の上巻末の「きんこくの山、ちこくせんしのたに、ほくせきのいはや」に一致するものは他の諸本に見られず、松濤本がどの系統に拠るのかはわからない。しかし、〈表(4)〉末尾の松濤本下巻冒頭部分は、下巻の天理甲本の本文に極めて近く、少なくともこの下巻冒頭部分に関しては、天理甲本系統の本文を引いているようである。とすると、問題の地名を含む上巻末部分は、天理甲本系統以外の系統の本文から取り入れられ、下巻の冒頭部分との整合がなされないまま、本文化されたのではないだろうか。この未整合の状態が、松濤本製作の段階で起きたのか、それとも松濤本の元本の段階で起きていたのかは不明だが、少なくとも松濤本の本文が、複数の系統の本文をもとに構成されていることの証左になるものと思う。

次に取り上げるのは、下巻の末尾部分である。松濤本のこの部分は後で述べるとおり大きな特徴を持っているが、ここに、

あなちちわかまへ、とてきたらねとこゝろをはこふ人はうれしき

という和歌一首が見える。この和歌は天理甲本には見えず、丹緑本、およびAⅢ系統の徳江元正氏蔵写本(以下、徳江本)にのみ見られるものである。松濤本の、この和歌を含む部分の本文を見ると、和歌の前後は天理甲本の本文に近く、細かな表現についても一致していることがわかる(次節の〈表(5)〉参照)。おそらく、松濤本の本文は、基本的には天理甲本系統を引きながらも、丹緑本系統、あるいは徳江本系統からこの「あなちち」の和歌を補うかたちで取り入れたのではないかと推測されよう。

さらに、細かな点だが、〈表(4)〉中、④「なけき行」の和歌の「ぬれて」の「て」の右横に、本文と同筆で「ぬい」の傍注が見出される。この注は、明らかに「ぬれて」が異本において「ぬれぬ」となっていたことを指摘しているが、この「なけき行」と同種の和歌を持つ大東急本、弘治本を見ると、いずれも「ぬれぬ」とはなっておらず、はたしてこの異本がどの本であるのかは、現時点では不明である。しかしながら、松濤本の本文作成時、あるいは書写時において、複数のテキストが存在していたことは確かであると言える。

以上、松濤本の冒頭部分、および上巻末部分を取り上げて検討し、さらに重要と思われる三点を指摘して、松濤本の本文構成の特徴を

分析した。冒頭に諸本一覽をあげて示したように、『熊野の本地』には現存し確認されているだけでも、多岐の系統にわたる実に多数の諸本が古くから存在している。そのことを含めて考えれば、近世初期から中期において、複数の『熊野の本地』のテキストを手元に置き、松濤本のような複合本文とも言うべき新たな本文が作られたと想定しても、何ら不思議はないであろう。松濤本に見られるこのような実態は、『熊野の本地』、ひいては御伽草子の本文がいかにして作られ、多くの系統に分かれる結果に至ったかの、一つの例証のように思われる。

三

御伽草子、就中本地物の巻末には、ほとんどの場合、読者の信仰心を高めるために付け加えられる末文が付され、物語で語られた神仏の靈験を強調し、その目的に沿った内容の詞章が記されている。松濤本『熊野の本地』にも、下巻巻末に末文に相当する部分が存在する。しかしながら他の諸本と比較した場合、松濤本のそれには特異な形態を見出すことが出来るのである。

〈表(5)〉上段に掲げた松濤本の本文は、下巻の巻末部分である。その前半部分(二十四行目まで)は、熊野権現の有り難き、そして波線(a)(b)二種類の経文を引いてそれを唱えるべきことを説き、またこの草子を読めば熊野へ実際に赴かなくとも参詣したことになる由を述べる。先に述べた末文としての機能は、この前半部分だけで十分果たしていて、本文がここで終わっても何ら不思議はない。しかるに松濤本は、その後、物語の後日談にあたる、善財王の九百九

十九人の后たちが死後赤虫になったという記事が続いており、さらに東方朔に関する故事及び波線(c)の経文を引き、念仏を唱えるべきこと、熊野三山は同一体であり、信仰すれば必ず利益があることを説いている。この部分は前半部分と内容こそ異なるけれども、末文の果たす機能の点から見れば何ら変わるころはなく、とすれば〈表(5)〉に掲げた松濤本の下巻末部分は、前半に第一、後半に第二という二つの末文が存在することになる。これは一体何を意味しているのだろうか。

松濤本の下巻末部分を〈表(5)〉下段に掲げた天理甲本のそれと比較してみよう。松濤本本文の前半部分(二十四行目まで)と天理甲本の下巻末全体を照合すると、松濤本のみが持つ二重傍線で示す和歌、および波線(b)の経文を除けば、両者は波線(a)及び(a)の経文や細かな表現等に関してほぼ一致しており、この前半部分に関して、松濤本は基本的に天理甲本系統の本文に拠っていると思われる。従ってもしそうであるならば、作品の構造上、天理甲本と同様にこの前半部分までで本文が終わって然るべきなのである。しかし松濤本の場合さらに文章が続き、第二の末文で全体が締め括られている。

松濤本下巻末の後半部分、すなわち后たちが死後赤虫になったという記事及び第二の末文は、これと一致する詞章を持つテキストを現在のところ見出せず、何れの本に拠ったのか不明である。この下巻末の後半部分のうち、赤虫の記事は、主人公である五衰殿女御たちが天竺摩訶陀国から熊野に渡った後の話、すなわち物語の後日談であるから、松濤本のように第一の末文の後ろに置かれるのは、本文の構成上不自然である。事実、この記事は、ほぼすべての系統の諸本に含まれるけれども、何れのテキストも末文の前にこれがあ

松濤本

これをもてあそはむともからは、男子女子をえらはす、二世のねかひをとけ、あんやうのしやうとにいたらしめんとの御ちかひにて、ほんかくしんによのみやこを出させ給ひて、ふんたむとうこのちりにましはり給ひしよりこのかた、りもつりしやうの御心さし、やむときなし。しかれはずなはちうるむろのみちをふみわけ、九ほむの上せつをへうし、とうめう二かくのさとりをひらかせんかために、この山をしめさせ給ふ。一と此山にいる人は、ひしみこうふさうしやりのゆへにあつかりて、まさにとうちやうにさして、しよふつのいゑにむまるゝ物なり。このさうしをよみもし、聞もして、すいきのなみたをなかせは、こんけんよろこひ給ひて、その人のかうへをなてさせ給ふといへり。されは神は、ほんちをあらはせはよろこび給ふ。さて、これをよみをはつてのち、てをあはせ、となふへきもんにははくなむせうしやうりやうしよこんけむにやく一わうしと三へむとなふへし。たとひわかところへきたらすとも、心さしをふかくはこひ申さは、まいりたるとおなし心におほしめして、御まほりあるへきとなり。されはこんけんの御たくせんの御うたに

あなかちにわかまへとてきたらねとこゝろをはこふ人はうれしき

とそあそはしける。されは、此物かたりを一とよめは、まいりたるうちにいり、百度千度もおなし事なり。又もんにいはくなむき

E 天理甲本

これをもてあそはむともからは、みなこと／＼く、二世のねかひをとけん、あんやうしやうとにいたり、けんらいゑごとく、にんてんして、一さいしゆしやうを、こくらくにみちひき給ふへしそも／＼こんけんの御ちかひは、むちたうそく、なんによを、きはす、みちひかんために、ほんかくしんによのみやこをたちいて、ふむんとうこのちりに、ましはり給ひ候よりこのかた、りもつりしやうの、こゝろさし、しそくも、やすむ事なし

しかれはずなはち、うるむろのみちを、ふみわけて、九ほんの、しやうせつをつうし、とうめう二かくの、さとりをひらくかるかゆへに、そくしんわうしやう、うたかひなし、一たひ、この山にまいりて、おかむ人は、まさに、たうしやうにさして、しよふつのいゑに、むまるゝなり

この物かたりを、一たひよめは、一たひくま野へ、まいりたるうちにいる、ひやくたひも、十たひも、又かくのごとし、このさうしをもちえさる物は、こんけんの御にくみを、かふむりて、ひんくうの、ほうをうけ、こせには、あくたうさへ、おつるなり

このさうしを、しんしてよめは、こんけんの、御よろこひたまひけり、南無せうしやう一しよ大ほざつ、りやうしよこんけん、やくしによらい、にやく一わうし、一まむのけんそく、十まむのこんかうとうし、くわんしやう申たてまつる

みやうてうらいにつほんたい一 大りやうこんけんゆや三しよこむけむざんぎさむげ六こんざいしやう六こんざんげと三へんも七へむもとなへ給へし。されは、こんけむ御よろこひありて、けんせこせのねかひをみてさせたまひて、しそむはんしやううたかひなし。よく御しんかうあるへきなり。かく日本へとせ給ふとき、九百九十九人の后たち、なをやすからずおほしめして、御あとをしたいわたらせ給ふを、仏神もにくしとやおほしめしけむ、にはかに大風ふきて、ふねをふきかへして、をのくそこのみくつとそなり給ける。されとも、このたましゐうせずして、あかむしといふ虫になりて、いたどりのうへにふりかゝりぬ。そのゆへに、くまのへまいらん人は、くいもせず、さはりもすなといへり。しんかうのともからも、くうへからず。かの御くひほりいたせし時、大わうのおほせには、九百九十九人のきさきたちをいかやうにもわうしの御心にしたかひて、かいたてまつらんとありしかとも、ころし奉りても五すい殿のいきかへり給へき事にあらすとの給ひて、ことなかりしかと、てんはちあたり給ひて、さうかいのそにしつみ給ふむくひの程おそろしき事なりとそ申あへりしとなり。わうしなをふひんのことにおほしめして、九百九十九しよのやしろをたてさせ給ひて、神となし參らせて、いまにおはします。仏神の御うえにさへ、かくのこときの御事あり。まして人間におひてをや。きのふみし人けふはなく、てんくはうてうろ、いしの火、いつれか人間にたとへざらんや。さきにしゝたまふ五すいてん、のちにしせる后たちも、いまはなのみそのこりける。とうほうさくか、九せんさいうつゝらる八まんさいも、いまはゆめにてあともなし。此ことはりをおもひしり、いかてかとうをねかひ、ねんぶつを申へし。ほつくと念仏は車の両輪のことし。むちのともからに、きやうたらにををしふるとも、いかてかとうかん。たゝきによつて、ほうをとくを、ちしやとす。ねんぶつは、しよきようをつめて、六字のみやうこうになせり。しかれば、あみた、しやか、くはんをん、いつれもとう一たいなり。されはきやうもんにもしやくさいりようせんめうほけきやうこむしやいさいはうみやうあみた仏ちよくせまつたいみやうくはんをむせりやくとう一たいなり。しかれば、くま野三所もすなはち、しやか、あみた、くはむをんなり。これをしんかうある人は、けんせにては、あんをんふくとくさいほうにみちく、子孫はんしやううたかひあるへからす。らいせにては、こくらくしやうとにむまれ、成仏うたかひなき物なり

り、本文の構成に問題があるものは他には見られない。ではなぜ松濤本には、構成上の不自然を犯してまで、第一の末文の後に赤虫の記事があるのだろうか。先に述べたように、赤虫の記事の前、松濤本下巻末の前半部分は天理甲本系統に拠っているが、実は、この天理甲本系統のテキストは、諸系統のなかで唯一、赤虫の記事を持っていないのである。このため、前節で述べたところの、複数系統の

諸本を手元において本文の作成を行っていたであろう松濤本の本文の編者が、天理甲本系統以外のテキストを参観した結果、この赤虫の記事を付け加える必要性を認めたのではなからうか。そうであるとすれば、(表⑤)に掲げた松濤本下巻末の後半部分は、松濤本文の主要な原拠である天理甲本系統での、赤虫の記事の欠落を補足するために、あるテキストからそっくり移されたものと考えられ

る。その際、ただ単に赤虫の記事だけを後に付加したのでは、作品が熊野三山への信仰を鼓吹する詞章で終わらないことになり、本地物の末尾部分として相応しくないものになってしまう。そこで赤虫の記事だけでなく、東方朔の故事、そして熊野三山が同一体であることを説く詞章までをまとめて引用して天理甲本系統に拠る第一の末文の後に繋げ、作品全体としての体裁が整うようにされているのではないだろうか。その結果、松濤本の下巻末部分は、他の諸本の末文に相当する部分を二つ持つという特異な形態になっていると思われる。

ただし、他の諸本の本文構成に照らし合わせて考えると、天理甲本系統に含まれない赤虫の記事を第一の末文の前に組み込んで補い、後日談を本来あるべき位置に置くのが、作品全体の体裁としてはより相応しいと思われる。しかし松濤本の本文の場合、そういった操作は全く行なわれず、赤虫の記事を挿んで二つの末文が存在する形態をとる。無論、先に触れたように、第一、第二の末文はそれぞれ異なった内容を持っており、全く同じ内容が繰り返されているわけではないが、もしもこの本文の編者が、既存のテキストをもとにして、その構成上、内容上の不備を補完しながら、全体的に首尾一貫し、整備された本文を新たに作ろうという意図を持っていたならば、今見られるようなかたちではなく、第一および第二の末文の内容を取りまとめ、ひとまとまりの新しい末文として、後日談である赤虫の記事の後に配置したのではないだろうか。この見地からすると、松濤本のその末文は、少なくとも二系統の本文が機械的に組み合わされている。

こういった末文の形態は、前節で述べた、松濤本の本文が複数の

系統の本文を組み合わせたかたちで成り立っているということ、全くもって符合する。本文冒頭部分および上巻末部分では複数系統のテキストに拠った小間切れた本文構成が見られ、特に上巻末部分での地名の齟齬にはかなり杜撰な編集態度が感じられる。また上巻の一部分では、おそらくは不注意によると思われる本文の脱落が確認された⁽¹⁶⁾。このように全体にわたって見られる本文構成上の特徴の中でも、就中末文において、複数の系統のテキストに拠る複合本文としての特徴が、非常に顕著なかたちで現われていると言えよう。

これまで見てきたように、松濤本『熊野の本地』には既存の諸本に見られない特徴が存在する。従来『熊野の本地』に関しては、いわゆる五衰殿女御の物語の内容を中心とし、熊野比丘尼の存在を配慮しながら、様々な視点から考えられてきたが、今回取り上げた松濤本の場合、従来触れられることの少なかつた本文自体の構成に関して、その特異性が現われていたように思う。またそれ以外にも、末文中に見られる経文類の引用、そして数多く含まれる挿し絵の問題など、まだ考察すべき点が多い。後稿に期したいと思う。

注

- (1) 具体的な書誌については、拙稿「翻刻『熊野の本地』」(『文献探究』第二十九号、平成四年三月)を参照されたい。
- (2) 松本隆信「中世における本地物の研究」(『斯道文庫論集』第九輯、昭和四十六年十一月)
- (3) 奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』(三省堂、昭和五十七年)
- (4) 沢井耐三編『室町物語 複製翻刻書目録』(『新日本古典文学大系 室町物語集下』岩波書店、平成四年)が最新の情報を掲載する。

(5)

鈴木宗朔・橋本観吉「柳川家本『熊野の本地』繪巻断簡」(『くちくまの』第八十七号 平成三年十一月)、同「柳川家本『熊野の本地』繪巻について」(『くちくまの』第八十八号 平成四年一月)で紹介されている繪巻断簡本は、役行者説話が話末に増補されており、修験色の顯著な、他に類例のない特異な異本とされる。

(6)

松濤本の本文については、ほぼ原態どおりに翻字したが、便宜上、私意に句読点を補った。

(7)

横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』四(角川書店 昭和五十二年)による。

(8)

松濤本は、善財王が九百九十九人の后達が仕組んだ計略のために五衰殿女御のもとを去る場面がそっくり欠落している(松濤本上巻十五丁表「行目」)。天理甲本にはこの部分は存在するのだが(上巻十六丁裏二行目、十七丁表十行目)、ちょうど上巻巻末部分にあたっていて、しかも挿し絵が前後にあり、おそらく天理甲本と同形態の元本からひいてくる際に不注意、あるいは何らかの理由で落としてしまったものと推測される。

(9)

横山重・太田武夫・森武之助編『室町時代物語集』一(大岡山書店 昭和十二年)による。

(10)

注(7)参照。

(11)

市古貞次校注『日本古典文学大系御伽草子』(岩波書店 昭和三十三年)による。

(12)

注(7)参照。

(13)

〈舟緑本〉水くきの、あとも見はかす、なりにけり。しでのやまぢの。たひにいそげは(注(9)参照)。
〈杭全本〉みつくきの、あともみならず、なりにけり、しての山ちを、いそく身なれば
〈大東急本〉みつくきの、あともみならず、しての山ちをいそく身なれば
〈弘治本〉水壘の又とも見えずなりにけり死出の山路を急ぐ身なれば

ば

〈高安本〉みつくきの、あとも見えず、なりにける、しての山ちの、いそきのみして(横山重『神道物語集』古典文庫 昭和三十六年による)。

(14)

天理甲本系統のテキストには、第一節に掲げた松本隆信氏の一覧表中の三本に加え、『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』(注(3)参照)によれば、秋田県満友寺本「絵巻・中一軸」(『秋田大学教育学部研究紀要』人文科学・社会科学第三十二集 昭和五十七年二月に錦仁氏の翻刻を掲載)が存するが、これも他の三本と同様、赤虫の記事を欠く。

(15)

注(8)参照。